



尾張迺家苞

一之下

愛知県文化会館

505246

A911
イ
2-1-2

尾張廻宿巻一之下

新古今集

春歌下

秋阿和歌所七在十空 樹也との兼風山  
はくはまきなるさくらを

大上天皇御歌

はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを

はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを

はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを

はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを  
はくはまきなるさくらを



たゞてん入探はしあへし大いはいわちてんそのあ  
佐人のまふりいしらすなりけしゆふちよとてはしあへし  
わすたれんらななりけしゆふちよとてはしあへし  
たゞてん入探はしあへし  
佐人のまふりいしらすなりけしゆふちよとてはしあへし  
わすたれんらななりけしゆふちよとてはしあへし  
たゞてん入探はしあへし

十五番并分

傳成

いせの春はなつりもあはれなり  
二の春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり

いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり  
いせの春はなつりもあはれなり

式子内親王

はらちて過し一かたをさすもてん花よわめり春さなる

世歌としてさす常もかていしつらなる

うねの入りていしつらなる

らまゝにさすもてん花よわめり春さなる

のほへとてはしあへし



ちせらもなきてははやく過まつるまゝのゆゑに  
 かきていれねたくなむ物ありへん事を多くへらるる  
 可なり  
すゝめはなしてハカカハカとてうまなまをいれまゝにまゝに  
 もおとふ事なすもなきてとあはるるのうらまを  
 等かたんならぬ事をもまゝにうけておぼいふ。又公女  
 たりたるの物ありてのまゝにうらまをいれまゝに  
 まゝに油カハすま事一年のうらまをうけていれ  
 たる物ありてもまゝの事をうらまといふ  
たゝ物ありていふまゝにうらまをいれまゝに  
 過一半月の日は何のりありせんかひなくまゝの事といふ  
 たるに何へつれをいれまゝにうらまをいれまゝに  
 たるおぼいひなる事ありてまゝにうらまをいれまゝに  
 たる過情なり。まゝにうらまをいれまゝにうらまをいれまゝに

あつてまゝにうらまをいれまゝに

まゝにうらまをいれまゝに

千五百由祈分

後成マ女

風より多神々の神のたのまゝに花の春夜の夢  
 袖の、乃て俗よごとくいふまゝに花の五のり  
 とく美へ一首のまゝに風の吹かす花のまの根  
 夢の袖さあけ袖がたのまゝにうらまをいれまゝに  
 多を門を下上いれまゝにうらまをいれまゝに  
 なき弁への上は三のちをわらうまゝにうらまをいれまゝに  
 梅の趣 木り桜のまゝに

梅の趣 木り桜のまゝに

しほて様の舟よなをぬれ都よあまももろくはなふとくやりの  
難くは時の人をさしあはとされし編き流しはくふかしくとあるまの  
なきおかくくことあやめい  
てはくまはくし家

守覺の親王五十首歌  
家隆相伝

世々三つも一らぬて玉律たりふ神くたの志をす  
初白いりやとてしわも一をばらふててもきく人へすれ  
一松の株よこまうらなれくわて他そのおきよらんまじりし  
一そよまきりなるを無ありて二松よりいひてりしそのおねまより  
なり三四の白玉おのたりふ人の神とよふまを  
あまわつしまり過て詞をいふは神の舟八雲知自在と  
とておののなをませりふ神人どもせたる  
ゆつりき之撰集はなるもあつたまはるはのりハハハ

心留寸を拜 げ兼はなれなきよあつわいををせの  
非のきかり姿をかりするへきなり

攝政家五首歌  
俊成つ

又やしし神のまの櫻りりたの雪らるまはれぬかの  
侍ハおのららぬともゆかちをまはれをけく物よひ  
かしちちをたの雪よいひかせらるいりり 物為  
ハば

アをかりりろいりぢ入しあはくくくくくく  
年若てえりやあんとり米をあやぢをがす

百首寄めし神歌の歌  
具親

何れあれなむしの心別入たららばのみすれぢ  
武彦のなれぢく大か三音押とつてかねん  
そはよくよをせるにあやまりてはひたる







あまきる天遊之空は横きつととと、そのよふ山つそまゝのありて  
ちのたれぬく月の遊りと月上のや縁の白きるれもじきたの  
ちのりきつてんたあひ

取勝四天王院障子赤野山うきたる所

太上天皇御製

みづねき根のほきぬるなりあしりぬき春の曙

卯こしりて定まらぬあひ 此良の山月あまきつてんたあひ

十五百番歌合、 定家御作

さくこの庭のいろ風流はせしとそそ人の言とさか さか

物二句く嵐もちるく嵐をすしそこのなひく又 く

一さかむつての梢よりたなほそふ春風は横きつととと

かをいちはてよとそそ残ゆかをな散てたははか

と流もちの縁の何にのちそりかをいれんたり

どぞのてもをそめてたり 一そのをてまきのふまてたの春風

ををいきて人よせたり うはてりてそそたつてそそ

かみあすハ言とをりかす ト白

一事あひて大内のたんよそりて作りたを散

て作りたを収めよ入て撰改の行はつたり

太上天皇御製

なふたも庭をゆりあしりつたはすかありもあしり

物言ふは縁の内白のる人そりたり つらねるへ心の

は白本歌くわんくわんはれまふあわ  
古歌をわんくわん  
あすはさうと

うらなうききさうんか  
うらなうききさうんか

福のものさうんあすさうんあす  
福のものさうんあす  
さうんあす

御返

攝改

はそいぬ人のためとや残りなきあすははさのたのぶ  
口のをながあすはさうんあすさうんあす  
今日は既さうんあすははれまふあすははさのたのぶ

明日はぬけきのさうんあす  
あすははさのたのぶ  
あすははさのたのぶ

その白もあすははれまふあすははさのたのぶ  
さうんあすははれまふあすははさのたのぶ  
あすははさのたのぶ  
あすははさのたのぶ

家の八重梅と折せて作りの親玉の体はつる  
か

式子内歌

八重梅と折せて作りの親玉の体はつる  
か



返一 惟明親王

つきかぎりつらふとに又様とていしてさるるつらと

ハもよくつらた  
とて又書とかなり

五十首歌集一附 家隆朝臣

はらうたさうらつらうと雪のたててあきき山順の春風

本歌さうら雪のたててつれなき天くふ古と集は  
かたも出さ

つれなきたんで八上下のふ山雪の絶たるさよつて来

てだてつれなきふ俗言ふ吉澤同断は俗言  
あてり吉澤

は甚くふ俗その中へ他系信教なくの信とてつまなき風

備を絶たなるふあり俗言ふ教なくふとそなり

そとふきてほしきく花をらとるふをほく信と

さる二のふ、女のやふよに俄に教をほくさうら  
よもつら

ふふまのたてたかなれぬ  
ふがたふふお絶守 けて又とををら雪へいひけ又

嶺のたれあやまきほくおかれて、白雪の絶るふぬさ

へいづれも白雪のたさてとるふ木花の消をを

おはよなき趣をくほ方とあはれなるやいとふま

かめりやふまふくのみそいそそのまふいそつらぬつらぬ  
ふつれなきおはれつらぬを教て前の一ら雪の中へ移さゆとて

あはま原とて

題一守 後成御女

うきやうきをたのいひつれはふ風あふみひさ

本歌、佳ぬれと力をうき春の根をたてはそふね



廿年のけりなゆな平の物よまたいひやまふ平は今のな  
まうかりへしそこらうかりまかきしなり

元の歌

殿前院大輔

たし又うしろいそかをたれいもいほらるのらつうを

物二りい我れはるんあふふふ中このたよとてしとていふ  
らそつうたれりてをいほらるんはのまらたしやいしとてしと

千五、番歌合

左近将良平

ちらたのよもししこの峰の唐をたは癒せを山ん

本歌をたは癒せを山ん  
たは癒せを山ん  
たは癒せを山ん  
たは癒せを山ん

とてしとていふ  
とてしとていふ  
とてしとていふ  
とてしとていふ

本歌のしりはるに冷みききか  
本歌のしりはるに冷みききか  
本歌のしりはるに冷みききか  
本歌のしりはるに冷みききか

くわいさくもはく  
くわいさくもはく  
くわいさくもはく  
くわいさくもはく

落た

雅經

花はをふさうを雨よ吹よて赤白岩の山風

なまらとあなふふよあわあわあをさうさうさうさう

たは癒せを山ん  
たは癒せを山ん  
たは癒せを山ん  
たは癒せを山ん

のまらとあなふふよあわあわあをさうさうさうさう  
のまらとあなふふよあわあわあをさうさうさうさう  
のまらとあなふふよあわあわあをさうさうさうさう

残香

攝政

くわいさくもはく  
くわいさくもはく  
くわいさくもはく  
くわいさくもはく

たのむにわが散るのむをいひて若師のむをいひて

たのむにわが散るのむをいひて若師のむをいひて

たのむにわが散るのむをいひて若師のむをいひて





雲のうらやうとてしるべきまきまをよらる舟とてむらき松とて  
しんとくをたたらつた何の浪もなき者よしのまきまのまきま  
まきまのうらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの  
まきまのうらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

十五回番分々 森蓮

かみしりつるや古葉はのひ舞馴れ花の枝のまきま

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

敬うあわれしむまはれたの跡もあきのまきま

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

うらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

公經

まきまのうらやうとてしるべきまきまのうらやうとてしるべきまきまの

物方はたらくはほのさかのりふ入飯山を運會一はこぼしてきよふ  
かのこ一やうたなをむとて流しるふまじこのやまより一そのまじやうゆかりて  
花からてはよみ入飯山はゆねはなほまじの流しをまじりかゝのまじやま  
見たまきまのまじりゆりてあらとてたてしゆりまじりまじりまじり  
ひたかく

百首歌も時 撰改

と山頼やうふたなま書かれてまじいふを時頼は

一そのまじりては山頼のまじりてたてたうふて花威まじり  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

花威山

芳野川舟の山吹風をわらわのほくはちちほねん

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

撰改

約もほ水もむ山吹はなをかまふわたの玉川

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

五十首歌も時 撰改

たてり舟のまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて







もまををしゑたり  
よの女の勢は 本歌を、たれたのほ  
のまはむ難きまのまをまうくまかりて、三のいとま  
なるを世集の比の巧みゆき  
よか六段、一そのま六段、二  
夏衣をたつす、まかりと

夏のほめは歌 後集の女

とちやいさつは久つ世中れいゝめれた深れきて  
お歌うつふおを世中の人の心はれを有らふ  
世中の人の心くくかをたれつういせき  
のかわとす 物二  
く人の心けらもあきまは、男女の中のをなす  
すはる不用本  
のちのち  
いへんかかり、ざりやのまつるま、つわりま  
へかして、た深衣をすて、夏はなれはるいゝ人の心  
一そのま

お  
一つりて、花の御を、  
夏衣をたつす、まかりと

荷院の神神宮を、た力親

とちやいさつは久つ世中れいゝめれた深れきて  
お歌うつふおを世中の人の心はれを有らふ  
世中の人の心くくかをたれつういせき  
のかわとす 物二  
く人の心けらもあきまは、男女の中のをなす  
すはる不用本  
のちのち  
いへんかかり、ざりやのまつるま、つわりま  
へかして、た深衣をすて、夏はなれはるいゝ人の心  
一そのま





















かゝるいふすゝをよみ成布をなを提引く  
なほいひなほ人かゝるいふすゝをよみ成布をなを提引く

百首歌をもせなる入道茶園白太政官

五月雨をよみの河原のよもしきうとてな海下は見え  
かゝの河原のよもしきうとてな海下は見え  
あはれをよもしきうとてな海下は見え

五月雨 定家朝臣

玉帯のなり人のよもしきうとてな海下は見え  
上りせがをよもしきうとてな海下は見え  
糸木が河をよもしきうとてな海下は見え

世にこれの海つぎて住居のふかきれん  
何の他つりしやわこゝろわし年

百首歌より時 松大納言忠良

あやめか油のよもしきうとてな海下は見え

よののけり  
みかたの

百首歌より時 室倉新下

わら雨の月つらねもよもしきうとてな海下は見え

つれなきまのつらねもよもしきうとてな海下は見え  
いづれにゆきまのつらねもよもしきうとてな海下は見え

太神言よりまひり夏舟の中

大上天皇御製

はらき次雪みのおうたに過ぬあはれぬあ人の五月雨此













その竹の葉より生ずる花は白く或は赤く其の葉の裏より  
赤く生ずる花の葉の裏より生ずる花の葉の裏より

武子の親王

寒らむき竹の葉は白く花の葉は赤く  
朝詠不短竹夜窓同外物白く花の葉は赤く  
二月は花の葉は白く花の葉は赤く  
くさくさ竹の葉は白く花の葉は赤く  
かへりてくさくさ竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
用ひてくさくさ竹の葉は白く花の葉は赤く  
夏の花は白く花の葉は赤く

鳥羽と竹風松露のふりそを

春言権大夫公徒

寒らむきいけ竹風松露のふりそを  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く

五十ヶ秋の竹 慈因大徳

結ぶ竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く  
竹の葉は白く花の葉は赤く



さるるほもをくあそりしとく

最勝四天王院障子も見惚るる石

通光卿

見惚月うんなき天の能もももしほは波のり式  
 二つとほく強りていも入むをま三つとほくわわ  
 なもあふひうとたり。ばよふもあつう國のりも  
 縁あり。一そすつて平のり。か  
か。は強ある。て  
 ちう。又をまもてしつきてしよこし。つとまはしんし  
しんし  
 月の入をまて波かえつとてねれぬをいしほの  
は波のり。三つとほく。天のり。かえん  
 夜のゆやまげんいんか。は強ある。かえん。しんし

びたてしゆめなきもやあふんか。是徳をのりつとてはく  
 るといんハ。能のりかちひひやをいしとくちよとまふか  
 へんしん  
 へりてはく。月入の縁あり。しんしをいしとてしよこ  
 えりてはく。二つとほく。月入のねりあをまはく。か  
 次。いんか。ちよこし。かえん。か。は強ある。か  
 廿二日の縁あり。入あふん。は。河原をすしてまも  
 したるか。は強ある。か。は強ある。か。は強ある。  
縁あり。しんし。か。は強ある。か。は強ある。  
 いんか。ちよこし。か。は強ある。か。は強ある。か。は強ある。

家の百首舟合 撰改

うはわてしす。いんか。ちよこし。か。は強ある。か。は強ある。か。は強ある。

原世六巻之三十一

二十九

あきらふいし月影をい涼しかりし。

攝政家とて活哥と金せむた水邊自妹涼と

いづるを

有家相作

すくは杖や入りてけつせ川や川の所杖の下落

預自妹涼は淡木とて涼手妹と書くこをいも勢

題さすやまむい半とよいかわをうあわへり

これら多岐多あり句題は霜葉に於二月末をいへばさうやくもあ  
のまはのつそまらうううあひあきよりすしといふ所は杖と自妹涼と  
うむい半のつそまらうううううううううううううううううううう  
解涼も杖のさくは涼いふをかんて手あひあきよりすしといふ所は杖と  
あきより半とよいかわをうあわへり  
あれはゆふいかなむさきす  
いかいせやかたね二のの題とあつるうううううううううううう  
いまいひをいひらうううううううううううううううううううううう

三夕恥しむるなり

三夕恥しむるなり

自妹涼を杖や入りてけつせ川や川の所杖の下落  
伏しあす又杖のぬくすしとて不経ふ杖やうてとらんをもれなり

つてもねむいふうううううううううううううううううううううう  
物即川や川の所の杖の下落の解は杖の解と

題一とあり

西行

乃のふー水をうら柙か全六ーとそをもまほりれ

六ーとまひてそまほりなむらなるをあまり涼し

えまはてとそ耐をうらなる事をもてとれ

つれいさうそなめさきえん乃の

よれつちやせのさあのらるひすしと墨多又立のそ

物匂ふ夏の暑き目新う葉葉のれあうたうおをあひと

とるそしけり目新の葉しとてそをいへり

とくたてあつても成の力のそくのでて  
ト多るもやと云居り先ほどは人の歌うつらうと云ふ  
ハコトハやまひたりればれはむいふこと

マシハあゆ  
なきやせり

千五五番歌合 公經下

一 ちかするたの三行くあたまつ村すあな夕たらの雲  
二三日のさかひにそよよれとゆかりあつまりなをなたらものまじ  
あかひの影をまなろ下と夕月流麗とこそく下夕つてこそ  
わりの二番 築なり

夏月 従三位頼政

庭のゆくまじとらぬ夕立れあはるる夕月  
空はわすれぬ夕立の影をくほしむる

玉首冊の半ふ 式子の親王

夕立の雲しとほぬ夏の月とて山と日と

傾く残りてゆき姿とら趣意やあは夏のはつたふ  
残れく時を期のおまよふと一首のくちあまら下白  
くくく下とせむとの字をかくれがなほ見む

しきり玉葉集風情集は信長は海軍の風あり  
いひたりわさうせき後平子藤原権を氣動をふとんか  
さひしんをそよぶのさゆやまひつねる舞しあつやの舞は  
ねみくしゆ地をたれに三かかの世をなすてまらば秋とのか  
らうとみよまの夕のまきはるまらりば秋とのか  
霧のあつて物への月と糸糸のの緒あり入の二の糸

の由中ハ八雲のの声とありがより何の子ゆあんは下



空のわすそつらとて 尾花うら風な夜の月も 萩文枝の  
 空のわすそつらとて 尾花うら風な夜の月も 萩文枝の  
 庭のかけこころをいふ かしら涙をさす人のさしなく山  
 亦霧のあかきとてをあるまはするいふれあわか  
 してあのをと物たへあるまはするいふれあわか  
 一さへ 上の二そのすけりハ七のさきたんれいれやハんをさちりハ枕にほそさあおいす教をさすハむをさすさするさ

十五番歌合 真納言意良

夕のなほとて庵の空のふはひのつらなる月

夕のなほとてはふのそととてはふのそと  
 のそととてはふのそととてはふのそと

百首歌合 撰改

秋らさき市村杜松かき輝の家のもやも葉とて森  
 秋らさきと 葉をいひしけなたり も葉とて森とてはふのそととてはふのそと  
 け色を紅紙かきとて流ながら け九せ流ながら 葉の紅  
 丹のよのさのあきも葉とて葉とて葉とて 丹のよのさのあきも葉とて葉とて葉とて  
葉とて葉とて葉とて葉とて葉とて葉とて

二條院撰改

か 葉のさきとて流まはれ秋をなたる柱のたはさ  
 葉のさきとて流まはれ秋をなたる柱のたはさ  
 なとて流まはれ秋をなたる柱のたはさ

五十七首歌合 撰改

昔も市屋にふらなる人の恨のふかきさるる秋夜

四の白くしきの塚下よふはげのけふ

螢火札配  
秋巴也と前

夕程 前六故大石

白露ははらききくらの寒のこころ 夕暮の光

一やほはか海の曲けは情こはれははひつす  
死をふるふをさく等よとるるるるるる

百首歌の中よ 式子内祝

なまのねの秋の秋よとれはなまのねの秋よとれ

かゝりてぬかぬよあゝくれぬき  
夏の夕暮のすうとてあや

夏の夕暮 慈田の傳

なまのねの秋の秋よとれはなまのねの秋よとれ

かゝりてぬかぬよあゝくれぬき  
夏の夕暮のすうとてあや

もの上トクニまじりしむらわき いぬきとてまじり  
のまじり

大神宮よものい 夏の夕暮の中よ

太上天皇御歌

山崎の嶺のわき雪とらぬい冬よとれはなまのねの秋

山崎の嶺のわき雪とらぬい冬よとれはなまのねの秋  
いぬきとてまじり  
のまじり

文治六年甲午八月

入石花岡白鳥歌

岩井のわきわりの小虫よとれはなまのねの秋

三のわき岩井のわきわりの小虫よとれはなまのねの秋  
かゝりてぬかぬよあゝくれぬき

千原南歌合 宮内卿

と序とよの浦をゆれにせりて後其身をよ  
 本歌よぶの浦をたしりしをいふる歌の ちよもをすむら  
 きかたはけがいにたはるるなをれ りてよむらむ  
 の痛くも長たはせりてれいよ りてよむらむ  
 さてははせとものとせ りてよむらむ  
 本がのりかひいふ河をつらなれ りてよむらむ  
 といふ りてよむらむ  
 といき りてよむらむ  
 はん りてよむらむ  
 はん りてよむらむ  
 はん りてよむらむ

一首無もり付

巻圓と傳い

夏ふらしたる りてよむらむ

本歌長 りてよむらむ  
 歌 りてよむらむ  
 い りてよむらむ  
 い りてよむらむ  
 け りてよむらむ  
 と りてよむらむ  
 ま りてよむらむ  
 た りてよむらむ  
 一 りてよむらむ



其のひびきをきくしうらてをのりまなちつるまきずあ  
 たることゝいふまてそおききこむなり。  
 なつに河をいふまてつあはれなり。  
 ふたひつをりあふなり。いふたのりて他の  
 かりなく。  
 二かなり。

愛 知 県



1105052461

911

イ

2-1-2